千葉日報（日刊）　2022年（令和4年）1月21日（金曜日）

千葉日報
発行所　郵便番号 260-0013
千葉市中央区中央4丁目14番10
千葉日報社
電話　043（222）9211
©2022
1月21日（金）

古着104点 新たな持ち主に

千葉女子高で循環プロジェクト

県立千葉女子高校（千葉市稲毛区）家政科の生徒が、全校生徒から着なくなった洋服を回収し、必要とする生徒や職員に無償で提供する取り組みを行った。ＳＤＧｓ（持続可能な開発目標）を意識した「古着循環プロジェクト」だ。生徒や保護者らから341点を回収し、このうち104点が新しい持ち主の手に渡った。同科の生徒は「新型コロナ禍が落ち着いたら、地域ぐるみで行いたい」と夢を膨らませている。

回収された古着を前に、友人と品定めする県立千葉女子高の生徒ら＝19日、千葉市稲毛区

SDGs ちば

同校家政科の全生徒約120人は、クラブ活動として「家庭クラブ」に所属。同クラブは、布を素材に小物類を作る活動をしており、布小物を通じた地域との交流にも力を入れている。

しかし、新型コロナの感染拡大に伴い休校や分散登校となり、全員で長時間集まっての活動が困難に。密を避けながら布を通じた交流についてクラブ員で話し合ったところ、社会的に関心が高まっているＳＤＧｓに焦点を当て、校内で古着のリユースを行ってはどうかとの意見があがり、昨年11月、まず家政科内で古着回収プロジェクトを試みた。

家政科の生徒から115点の洋服を回収。約半数の衣類にもらい手がつくなど好評だった。普通科の生徒からも「普通科も参加したかった。全校でもやってほしい」「まだ着られるけど着ない服があるから誰かに着てもらいたい」などの声が寄せられ、全校に拡大することを決めた。

今年1月11日から4日間、昇降口に専用の回収ボックスを設置。同クラブの生徒が描いたポスターを校内に掲示し呼び掛けるなどしたことで、ブラウスやワンピース、靴など計341点が集まった。

コロナ後「地域ぐるみ」の夢も

配布は19日の放課後と翌20日の昼休みに実施。前回もらい手のつかなかった古着も含めて、所狭しと会議室に並べた。訪れた生徒は「かわいい」「似合う」などと話しながら、友人と互いに服を選びあっていた。今回でももらい手のつかなかった洋服は、発展途上国の子どものポリオワクチン代に代える古着回収団体に寄付する。

友人と一緒に訪れた1年、中山萌さん（16）は「コロナの拡大で外出しての買い物を控えており、冬服が少なかった。ありがたい。ＳＤＧｓについても考えるいい機会になった」と選んだ洋服を手に笑顔で話した。

同クラブ会長の3年、宮寄まどかさん（18）は「想定よりも多くの古着が集まった。資源の循環に関わり、ＳＤＧｓを体感できるいい機会。コロナが落ち着いたら、このプロジェクトを地域ぐるみで行い、また地域交流につなげられたら」と話した。

千葉日報

2022年1月21日

古着１０４点新たな持ち主に　コロナ後「地域ぐるみ」の夢も
千葉女子高で循環プロジェクト　【ＳＤＧｓちば】

回収された古着を前に、友人と品定めする県立千葉女子高の生徒ら＝１９日、千葉市稲毛区

千葉県立千葉女子高校（千葉市稲毛区）家政科の生徒が、全校生徒から着なくなった洋服を回収し、必要とする生徒や職員に無償で提供する取り組みを行った。ＳＤＧｓ（持続可能な開発目標）を意識した「古着循環プロジェクト」だ。生徒や保護者らから３４１点を回収し、このうち１０４点が新しい持ち主の手に渡った。同科の生徒は「新型コロナ禍が落ち着いたら、地域ぐるみで行いたい」と夢を膨らませている。

同校家政科の全生徒約１２０人は、クラブ活動として「家庭クラブ」に所属。同クラブは、布を素材に小物類を作る活動をしており、布小物を通じた地域との交流にも力を入れている。

しかし、新型コロナの感染拡大に伴い休校や分散登校となり、全員で長時間集まっての活動が困難に。密を避けながら布を通じた交流についてクラブ員で話し合ったところ、社会的に関心が高まっているＳＤＧｓに焦点を当て、校内で古着のリユースを行ってはどうかとの意見があがり、昨年１１月、まず家政科内で古着回収プロジェクトを試みた。

家政科の生徒から１１５点の洋服を回収。約半数の衣類にもらい手がつくなど好評だった。普通科の生徒からも「普通科も参加したかった。全校でもやってほしい」「まだ着られるけど着ない服があるから誰かに着てもらいたい」などの声が寄せられ、全校に拡大することを決めた。

今年１月１１日から４日間、昇降口に専用の回収ボックスを設置。同クラブの生徒が描いたポスターを校内に掲示し呼び掛けるなどしたことで、ブラウスやワンピース、靴など計３４１点が集まった。

配布は１９日の放課後と翌２０日の昼休みに実施。前回もらい手のつかなかった古着も含めて、所狭しと会議室に並べた。訪れた生徒は「かわいい」「似合う」などと話しながら、友人と互いに服を選びあっていた。今回でももらい手のつかなかった洋服は、発展途上国の子どものポリオワクチン代に代える古着回収団体に寄付する。

友人と一緒に訪れた１年、中山萌さん（１６）は「コロナの拡大で外出しての買い物を控えており、冬服が少なかった。ありがたい。ＳＤＧｓについても考えるいい機会になった」と選んだ洋服を手に笑顔で話した。

同クラブ会長の３年、宮嵜まどかさん（１８）は「想定よりも多くの古着が集まった。資源の循環に関わり、ＳＤＧｓを体感できるいい機会。コロナが落ち着いたら、このプロジェクトを地域ぐるみで行い、また地域交流につなげられたら」と話した。